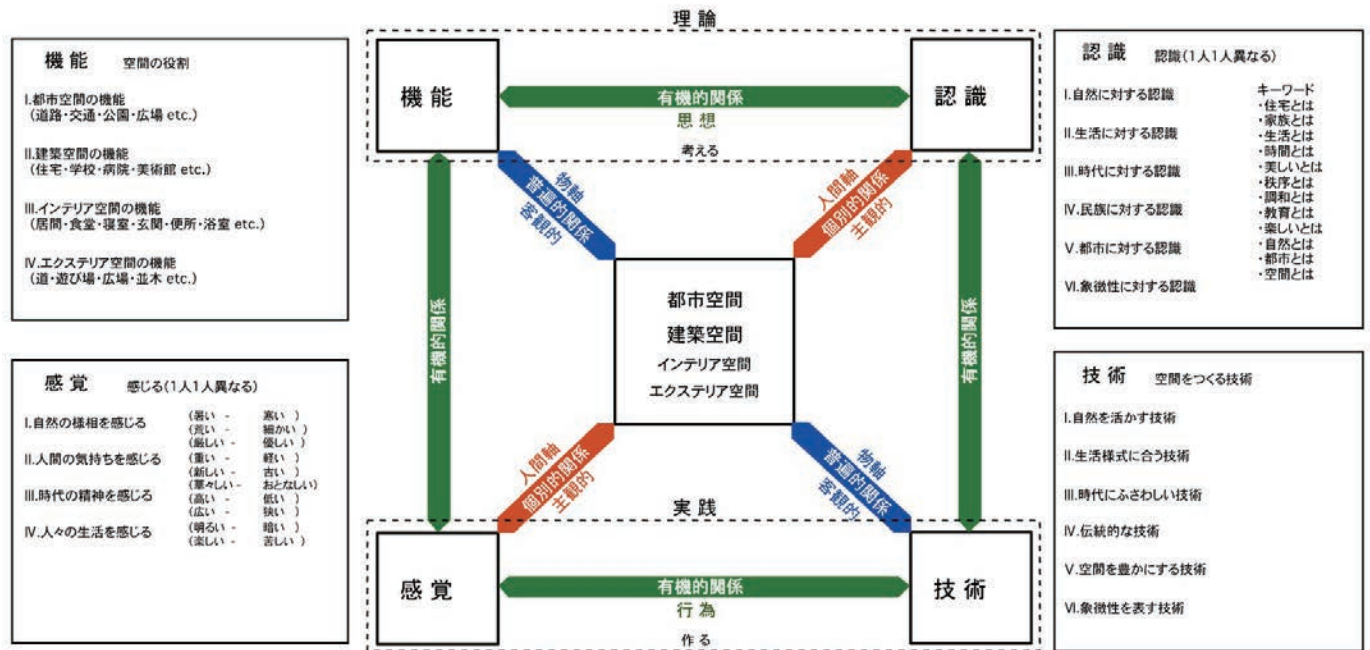


自然と生活と建築と都市

都市と建築空間のデザイン構造



都市と建築空間のデザイン構造について私の考え方を述べるとともに、西洋と東洋の自然観の違いからくる建築に対する態度の違いについて述べる。

都市と建築空間のデザイン構造についてみると、第一認識として、いろいろな考え方はあるものの基本的には一つであると考えられる。

私は都市と建築空間のデザイン構造を次の四つの要素で考える。第一に、「機能」である。都市空間や建築空間、インテリア空間として、人が住まうという機能である。第二に、「認識」である。これは個人個人によって異なる部分もあるが、基本的には自然、生活、時代などエネルギー問題や、自然環境に対する認識である。第三に「感覚」である。人が住むときに、

自然や気持ちや精神をどう感じるかということである。第四に「技術」である。テクニカルな部分での技術である。

この要素のうち、機能と認識は、考えるという行為に当たる。また感覚と技術は物を作るという行為に当たると考えている。

そして認識と感覚は、客観的な要素であり、技術と機能は主観的な要素であるといえる。

これらの要素がないまぜになって、都市および建築物が作られている。この四つの要素がバラバラではなく有機的に結合して、空間が作られ、生まれてくると考えている。過去とこれからのまちづくりの違いについて述べる。

計画における従来の価値観

かつての計画における基本的な考え方は「自己完結型」で、周りとの関係は不連続な構成になっていた。その事が、都市や建築の計画に表れていた。すなわち、ニュータウンにおいても、周囲にバッファゾーンを設け、周りの空間から隔離したものを造ってきた。計画地は既存の市街地から断絶し、一つ一つの建物も個別性がなく、画一均質なものになっていた。

しかしこれからのまちづくりでは、各要素の関係性を図り、それらが重なる手法を「重層発展型」と呼び、周辺地域にみられる歴史や、地政学的な特性を踏まえて、新しいまちづくりをするべきである。プロジェクトと周辺地域の境界線の外からの要素が、プロジェクトの内側に入ってくる。また逆に内側から外側へと広がっていく。計画地との周辺との間に有機的な関係を結び、つながるこ

とがこれからのまちづくりにおいては重要である。中から外、外から中という方向性が交わりあってまちづくりがなされる。隔離したものにはならないまちづくりの手法が大切であると考えている。

都市空間モデルの3要素

このモデルは具体的にはどのようなものか。現在の都市空間のモデルに対して、都市の要素を3つに分けて考える。第一に自然要素である。第二は生活要素、第三は人工物要素である。この三つの要素が、時間軸に沿って、変化し続けるものであるととらえることが重要だ。

そういう時間の流れの中で、都市が変化していくものという考え方をし、そのなかで計画地を位置づけ、主体性を持ちながらも周辺との関係を持ち、また周辺と融合していくまちづくりが主要である。時間軸的にはそういった見方をしつつ、空間軸的には、計画地の内側から外側

へ、外側から内側へとといったベクトルがまじりあい、影響しあうまちづくりを行うことが必要である。

計画の手法・要素の関係性

都市、建築空間を、このように時間軸と空間軸とであらわす考え方を踏まえて、私の考える都市計画作りの手法について述べる。

計画地および周辺地域について、要素を抽出し、それをレイヤー化して重ねてみる。要素とは、たとえば、計画地および周辺の自然地形、緑、ライフサイクル、ライフステージ、都市空間要素、建築空間要素などである。これらの要素を重ね合わせることで各々の場所の個別性や特異性が明らかになり、またそれを連続的にみることで、個性豊かな場が連続する多様で魅力的な空間が生まれると考えている。たとえば、地形と緑のレイヤーからは、地形と緑の関連性が浮かび上がり、高木、中低木に分けてみることで、その場の特性を

都市と建築のデザイン

計画における従来の価値観

1. 自己完結型
周辺地域と無関係に計画をすすめていく考え方

- 計画地の立脚点が計画地内にある
- 従来のニュータウン開発に見られる手法
- 市街地の一般建築に見られる手法

主体性のある計画

新しくできる街

計画地と周辺地域との間に断絶的な境界線が生じる

⇒ 計画サイドからのみの秩序を示す

都市と建築のデザイン

計画における従来の価値観

2. 同調調和型
周辺地域を視野に入れ、街の文脈と融合する考え方

- 計画地の立脚点が周辺地域にある
- プレハブ住宅開発のように、周辺地域に見られる既存の価値観をそのままくりかえし用いる手法
- 伝統や歴史的な建物の街並を再生し、周辺と連続していくことをテーマとした低層ワンハウスなどに見られる手法

周辺地域との連続性

新しくできる街

計画地と周辺地域とは連続一体的に融合し合うが、計画独自の主体性はない

⇐ 周辺地域からの秩序を示す

都市と建築のデザイン

街づくりに対する計画の手法

3 重層発展型

■計画の基本概念

周辺地域に見られる歴史的・地形的・特性的と、新しい計画条件を重ね、地域全体を成長発展させる考え方によって計画を行うことを基本とする

周辺地域との連続性

主体性のある計画

計画地と周辺地域との間に有機的な関係が生まれ、計画の独自性も獲得できる

計画の基本概念

主体性を持ちながら
周辺の街と融合する計画

新しくできる街

自然環境のある計画

人工物要素

生活要素

空間軸

時間軸

【空間モデル】

都市と建築のデザイン

街づくりに対する計画の手法

計画の基本方針

内側からと外側からの二つの矢印が重なり互いに補完しあう領域が生じ、それによって計画地と周辺地域が一体となって成長・発展していく。結果、街全体としての価値が高められる。

「主体性を持ちながら
周辺の街と融合する計画」

人間の生活環境の形成

自然の要素
人工物の要素
生活の要素

現状の要素分析

時間軸
空間軸

計画への反映

都市・建築・インテリア・エクステリアのデザインゾンド

都市と建築のデザイン

街づくりに対する計画の手法

■街づくりに対する計画の手法：要素の関係性（連続性）を計る

要素については下記のような要素に限定するものではなく、もっと多様な要素が想定される。今ここでは「例えば」ということで、9つの要素を取り上げている。

- 要素1 周辺、及び計画地の自然地形の関係を計る
- 要素2 周辺、及び計画地の緑の関係を計る
- 要素3 周辺、及び計画地の自然環境の関係を計る
- 要素4 周辺、及び計画地のライフサイクルの多様性を計る
- 要素5 周辺、及び計画地のライフステージの多様性を計る
- 要素6 周辺、及び計画地のライフスタイルの多様性を計る
- 要素7 周辺、及び計画地の都市空間要素（道路・公園・広場等）の関係を計る
- 要素8 周辺、及び計画地の建築空間要素（形態・高材・色調等）の関係を計る
- 要素9 周辺、及び計画地の内部・外部の空間要素の関係を計る

各要素を重ねさせることから、各々の場所の個別性や特異性が生まれ、それらが連続することによって、個性豊かな「場」が連続し、多様で魅力的な都市や建築、インテリアやエクステリア空間が生まれる。

都市・建築・インテリア・エクステリアのプラン

読み解くことができる。

また、生活の要素からみれば、ライフサイクル、ライフスタイル、ライフステージのレイヤーの重ね合わせから、計画地の多様性を図っていくための方向性が浮かび上がるであろう。さらに空間的には公園、ポケットパーク、建築物や素材、といったレイヤーを重ね合わせて、他のレイヤーとの関連性を見て、計画していくことができるであろう。

東洋の自然観

次に、東洋と西洋（欧米）の自然観の違いからくる建築に対する態度の違いについて述べる。

日本の苔寺を例にみると、日本の

庭は、水を張った池や岩、滝などの具象と、枯山水などの抽象との間に、美を見てきた。また庭には軸線といったいかにも人工的な作為をせず、さらに視点場などといった人間のための場をおいていない。視点が動く事で常に風景が変化し、とどまる事のないシークエンスの変化がある。そして、対象物である樹木や苔等も成長もするが、朽ち果てもし、常に変化し続けている。

西洋の自然観

それに対して、西洋では、自然は恐ろしいものとしてとらえられ、できることであれば人間が征服すべきものとしてとらえられていたのでは

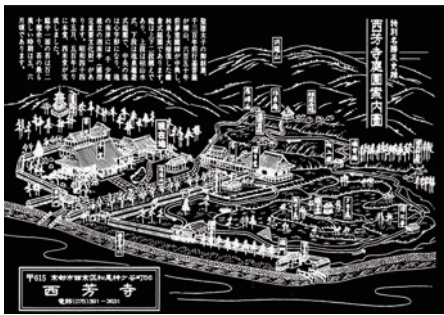
ないか。このため、ベルサイユ宮の庭を見ても、人為的な軸線が作られ、また庭を見るべき場所としての視点場が設けられている。

ここに西洋と東洋の作りよりの違いがみられる。

作られた姿、そのままを維持しようとするのが西洋的な発想で、あるがままに任せ、大切にするのが東洋的な見方であろう。

西洋では、人が自然を都市に作り替えていくという考え方が根底にあるのではないか、そこからいわゆるマニュアル化といった行為につながっていると考えられる。

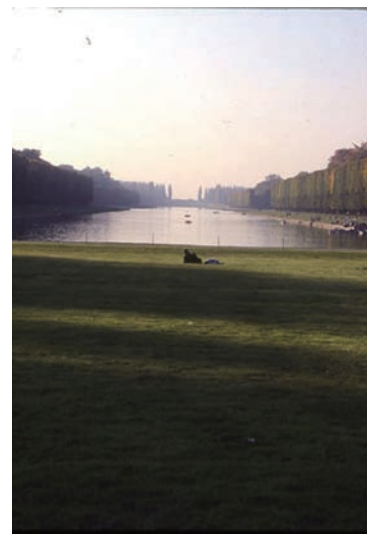
これは、日本にはなじまないので



はないかというのが私の考えである。

<出典>

- ・西芳寺パンフレット
- ・岡崎文彬、「造園の歴史 II」、同朋舎出版、1982年
- ・写真は全て遠藤剛生撮影



『自然と生活と建築と都市』

発行：2012年3月

レクチャー：遠藤 剛生（遠藤剛生建築事務所）

執筆：遠藤 剛生（ // ）

記録・作成：倉知 徹（関西大学 先端科学技術推進機構）

（講演：2011年11月16日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>